

戦争の記憶 絵本で伝えたい

田島征彦さん 堺で企画展

【大阪支社】堺市に生まれ、高知で育った型絵染作家、田島征彦さん(76)の型絵染や原画を集めた「ファンタジーを染める―たじまゆきひこ展」がこのほど、堺市博物館(同市堺区)で始まった。会場には、長年取り組んでいる祇園祭の型絵染とともに、堺大空襲を描いた絵本「ななしのごんべさん」など、戦争の悲劇を伝える絵本原画も多く展示。田島さんは「戦争を知る人間として、僕は絵本で次の世代に記憶を伝えていきたい」と言う。9月4日まで。(佐藤邦昭)

田島さんは戦後間もない5歳の時に現在の高知市春野町に移り、京都の美大へ進んだ。現在は兵庫県淡路市に居を構えながら沖繩をテーマにした型絵染作品を制作している。出身地の堺市で本格的な企画展を開くのは初めて。京都の祇園祭の型絵染など100点余りを展示している。

原画、型絵染100点余



色鮮やかな型絵染の祇園祭などが並ぶ会場で、作品についてマイクで語る田島征彦さん(手前中央)(写真はいずれも堺市博物館)



「ななしのごんべさん」=上=や、「よしこがもえた」など戦争題材の原画も多い

襲撃報もない中で機銃掃射を受けた。水が真つ二つに割れて、必死になって防空壕へ逃げた」と語る。2003年に出版された絵本「ななしのごんべさん」は双子の兄弟と、少女との交流を軸に戦争の惨状を描いた。兄弟が戦闘機から機銃掃射を受ける描写もある。

冒頭、少女の父は出征し戦死。〈おとうちゃんは遠い南の海の底で(身元不明の『ななしのごんべさん』)になってしまいはったんや〉と言う。終盤は堺市を焼き尽くした堺大空襲を丹念に描く。おなかの大きかった母が爆風に飛ばされ、猛火の中を子どもたち3人が逃げ惑う場面で物語は終わる。

「堺大空襲の時、僕は疎開していたので直接の記憶はない。でも、戦闘機に狙われたりして、奇跡的に生き延びた1人として、ずっと伝えていかないといけないと思っている」と田島さんは話す。

ほかにも姫路空襲を扱った「よしこがもえた」や、沖繩戦を伝えた「てっぽうをもったキジムナー」、田島さんの移り住んだ淡路島で会った自閉症の青年と同級生との交流と成長の記録を描いた「ふしぎなともだち」なども展示されている。

田島さんは現在、米軍基地が集中する沖繩の現状を伝える絵本を構想中で、沖繩へ足しげく取材に通っているという。

「戦闘機が飛び、ジュゴンの住む島を埋め立てられることを、沖繩の子もたちがどう見ているのか。ヤマトの人たちに伝える仕事をしていきたい。何年か、十何年かかるか分からないけどね」